

近江八幡市白王町の行者講

— 地域に息づく伝統行事の現状とこれから —

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長

加藤

賢治

近江八幡市白王町の行者講

―地域に息づく伝統行事の現状とこれから―

成安造形大学教授／成安造形大学附属近江学研究所研究員・副所長 加藤 賢治

はじめに

筆者は、これまで宗教民俗学の観点から、地域に息づく伝統行事に目を向け、それらを支える多くの人々の声を拾いあげてきた。

「講」については、現在も行われている大津市真野の「庚申講」^{〔註〕}の実態や、同じく大津市真野中村の「六斎念仏」^{〔註〕}などについて取りあげてきた。その際に、近江八幡市白王町の「行者講」は気になっていた。それは、その年の当番である人物が、頭から水を被って集落を走るといふ奇行で知られ、滋賀県では、年中行事の記事として、毎年新聞やテレビなどで紹介される行事であり、一度取材をしたいと思っていた。二〇二五年度に編集する文化誌『近江学』のテーマは「講」であることもあり、以前から興味を持っていた「行者講」を探ってみることにした。ただ、調べてみると、残念なことに、水をかぶるといふ行事（白王の水行^{〔註〕}）は、コロナ禍に見舞われた、二〇二一年以降実施されていないということがわかった。しかし、「講」としての集まりは持たれており、その他にも、自治会活動と並行して、複数の「講」が組織されているという。この論考では、今後、この「講」をどのように継続させていくのか、また、一旦中止となっている「水行」が再開される

可能性があるのかを含め、現状を取材し「講」の行方を探ってみた。

第一章 行者講の概観

(一) 講とは何か

はじめに、行者講とは何かを述べる前に、「講」とは何かという大前提を以下に記しておく。

民俗学でいうところの「講」とは、民俗学者の櫻井徳太郎が一九六二年に吉川弘文館から出版した『講集団成立過程の研究』に詳しく述べられている。その中で、櫻井は講の性格を下記の三つに分類している。

- ① 信仰的な集団としての講
- ② 経済的な集団としての講
- ③ 社会的な機能を備えている講

信仰的な集団としての講とは、代参講として成立しているもので、代表的なものとしては、伊勢講^{〔註〕}が挙げられる。江戸時代中期ごろに盛んとなり、集落の中で講を組織し、概ね月に一度ないしは二度程度集まりを持って、お金を集め、年に一度代表でお伊勢参りに行く人物を決めて、集まったお金を伊勢までの旅費や家内安全・無病息災のお札の購入に充てるというものである。江戸時代の旅は全てがこのよ

うな神仏への代参であり、代表者はお参りとお札の購入を目的とするものの、旅を楽しみ、自らが暮らす地域以外の場所を見聞し、そこで得られた情報を土産話として、帰った時に村人に話をするという、非常に貴重な役割も担っていた。このような代参講は、伊勢講の他に、富士山に登拝する「富士講」や、火の元の用心のために火伏の霊験がある静岡県浜松市にある秋葉神社に参るための「秋葉講」、関西では、同じく火伏の神である愛宕権現に参るために京都市の愛宕山に登拝する「愛宕講」などが知られる。

代参講以外にも信仰的な講には、「観音講」「阿弥陀講」「地藏講」「庚申講」「念仏講」など、民間信仰の一つの形式として、観音菩薩や阿弥陀如来など、特定の仏様を信仰するために、講員が当番の家に集まって、飲食を伴う行事を行っている。

一方で、経済的な集団としての講とは、「頼母子講」に代表される相互扶助的な講である。十軒程度の家が集まって、講員がお金の積立を行う。現在のような金融機関が発達していなかった江戸時代では、まとまったお金を得ることが難しかったため、集落で講を組織して少しずつお金を貯め、まとまったお金が集まった段階で、抽選などによって、一人に全額を与え、数年間かけて全員がまとまったお金の受け取った段階で講を解散するというものである。まとまったお金の使い道はさまざまであるが、急遽お金の必要となった家に、そのお金を回すという相互扶助の役割も担っていたという。近代になって個人が、金融機関を通じてお金を調達できるようになると頼母

子講の役割は終了したと考えられ、頼母子講が今も続いているという報告を聞くことはない。

また、社会的機能を持つ講としては、子供組、若者組、壮年組、老年講、同年講などの集落などの地域社会の中で、同世代で講のような集団を組織して、祭礼や行事にその集団で参加し、交流を深めるものがある。同年という組織は、筆者も過去に取材したことがあるが、「註3」いわゆる同級生がグループをつくり、毎月どこかの家に集まって飲食をして親交を深め、お金を積立して全員が厄年となる年に、産土うぶすな神となる神社にまとまった金額で修理や、祭礼の道具などを奉納するなどする。

このように、講とは、民俗学、社会学、宗教学を通じて、多角的に研究が進められているが、江戸時代を中心に、全国各地にさまざまな「講」が存在し、一人の個人が、複数の講に所属して、楽しく暮らす姿があったと想像できる。

(二) 行者講とは

では、行者講とは何かということであるが、行者講というものも、大きくは二つに分けられる。一つは、修験道の祖師である役行者を信仰の対象として、その霊場で霊験を得る修験道の実践的な講である。飛鳥時代に役行者が開山した奈良県南部の大峰おおみね山山上ヶ岳さんざんじょうがたけに登山し、修験者として山伏の装束を身につけ、修行を行いながら自らが霊験を獲得し、採燈護摩供さいとうごまくを行う講である。採燈護摩供とは、無病息災、家内安全、商売繁盛、学業成就などの人々の

願いが書かれた護摩木を、護摩壇で焚いて、人々の願いが成就するように祈る行事である。

もう一つの行者講は、大峰山山上ヶ岳にお参りをする代参講である。これは先述した、信仰的な集団としての講に属する講であるといえる。今回、筆者が取り上げる近江八幡市白王町の行者講は、白王町という集落の中に組織され、月に一度の講の日に、役行者の掛け軸の前に、講員が集まり、簡単な神事後、飲食をして集金し年に一度大峰山へ代参がお参りに行くという集団である。

第二章 白王町白部の行者講

(一) 白王町の行者講(新講・旧講)の現在

白王町はかつて白部しらべと王ノ浜おののはまという二つの字からなり、明治時代のはじめに字が合併して現在の白王町となった。白部の現在の戸数は約四十戸で、その中に行者講が二つ存在する。新講と旧講と呼ばれ、講員はそれぞれ十三軒の家長が務める。

今回、新講の講員である大西實氏に話を聞く機会を得た。

大西氏によると、本来、この行者講は、代参となつた者が、五月八日の戸開けから九月三十日の戸閉めの期間内に年に一度大峰山山上ヶ岳の金剛蔵王権現を祀る蔵王堂に参拝し、講員全員の札を受け取り、配布するという。不動明王の命日が六日「註4」ということ、毎月六日に講員が決められた宿やどに集まり、不動明王の掛け軸をかけて般若心経を唱え、会食を

していたというが、十年ほど前にこの月参りは省略され、一月六日の初行者講と九月の年に二度のみ、講員が集まっているということである。

代参については、かつては概ね九月に大峰山に参拝していたが、現在は麓にある天川村の洞川温泉にある陀羅尼助を販売するお店に連絡して、お札を送ってもらっているということであった。お札は役行者が描かれた白黒のもので、家内安全や無病息災の願いが込められ、貼る場所は各家によってまちまちで、お札の箱に入れて大事にお祀りする家もある。

かつて、この行者講は、白王町だけでなく、隣の町である島町や中之庄町などでも盛んに行われていたという。そして、白王町も含めこの地域の行者講の特徴は、代参で大峰山に向かう者が、一週間前に川などで不動明王の真言を唱えて水垢離（水垢離）を行うことであった。

この水垢離をコロナ禍前まで行っていたのが、白王町白部の行者講である。

（二）白王町白部の水垢離（水行）

白王町白部の水垢離は、一般には「白王の水行」と呼ばれている。以降は水行と表記する。現在の水行は、一月六日の初行者講の日に行われていた。水行を行うのは、基本は大峰山に代参に行く行者ということであるが、厄年の者や、特別に願をかけた者が水行を行うことができた。太平洋戦争の戦時中には無事の生還を願って水行をする者もあったという。



写真1 2004年の水行の様子① 大西實氏提供



写真2 2004年の水行の様子② 大西實氏提供



写真3 2004年の水行の様子③ 大西實氏提供



写真4 2004年の水行の様子④ 大西實氏提供

大西氏によると、水行を行っていた時、必ず半月ほど前に新聞やテレビの取材が入り、今年は誰が水行をするのかという問い合わせがあったという。「決まっています」と返答すると「なぜ?」「決まっていないとはどういうことですか?」と驚かれたという。

水行は、かつては代参の者が水垢離として行う慣習であったが、近年は申し出によって決めていた。毎年、十二月になると、「今年は誰がやる?」という雰囲気が集落の中に広がる。大事なことは、集落の者にとつて、水行を行うことは決して避けたいものではなく、「水を浴びさせていただく」という精神で、水行を行う者が申し出るといふ。そこにこの行事の信仰として大切に守られてきた意味を感じる。大西氏が子供の頃は、行者の力強さ、勇ましさに憧れ、将来はかっこいい行者になりたいと思っていたという。

水行を行う行者は、新講、旧講からそれぞれ一名



写真5 ナンテンの枝が入った清めの水
大西寛氏提供

の計二名であるため、申し出が多い年は、長老が申し出者の思いを聞いて独断で決めていた。マスコミが取材するタイミングで水行を行う行者が決まっていないことがこの水行の特徴でもあり、興味深いところでもある。

一月六日の夕方、水行を行う行者二名が、白王町の東端の家に集まり、長老が導師役を務め、庭で火を焚いて般若心経を唱えることから始まる。

行者の姿は、草鞋をはき、六尺褌（かつては洪紙）をつけ、ほぼ裸同然で、頭にはビニール（かつては洪紙）をかぶってサラシで締め付け直接頭に水がかからないようにする。首には念珠をかける。

集落の家では、清めの水が入ったバケツを一つずつ用意する。清めの水は、各家で用意するが、必ずナンテンの実と枝（難を転ずるの意味）を入れる。バケツの数は講員であるなしに関係なく、集落の家数となるので、合計四十個。「お水取り」と呼ばれる人が、「この水とったり」と唱えて行者を先導し、行者は、「南無行者不動」と叫んで、念珠を噛み締め、

頭から清めの水をかぶる。行者は四十軒分の清水をかぶっていくという非常に厳しい行となる。

集落の西の端の家で温かい風呂が用意されており、水をかぶり終えた行者はゆっくりと湯船につかる。こうして水行が終わると、講員が代参の費用となる白米を集める。そして、新、旧それぞれの講の宿の家に講員が集まり、うどんやぜんざいなどが振る舞われる。旧講では、百万遍数珠練りが行われたという。こうして、年始の初行者講が終了するという流れであった。

第三章 講のこれから

(一) 白王町の講

現在、二〇二〇年を最後に行者講における水行は、一旦中止ということになっている。理由はコロナ禍において不要不急の行事ということで自粛され、その後は、水行を行う人物が現れないということ、中止という状態のままである。ただ、水行は中止しているが行者講自体は継続されており、一月と九月には、講員が集まって簡単な神事と食事会が行われている。

白王町には、行者講の他に「日待講」「神明講」「伊勢講」「愛宕講」「津島講」という講が存在している。「日待講」と「神明講」の講員は、白王町白部地区の東組十七人、中組十人、西組十人、王ノ浜地区の大西組十人ということで、白王町の全戸の家長が講

員ということになる。各組ごとに講が行われ、二月十七日（伊勢神楽の前日）に行われるのが「日待講」、稲刈りが終わった十月中旬に行われるのが「神明講」と呼ばれ、コロナ禍前までは、各組ごとに、掛け軸の前で祝詞をあげ、そのあと懇親会をしていたとのこと。

「伊勢講」と「愛宕講」、「津島講」は代参で本社にお参りにいく目的を持った講である。伊勢講は、白部地区の東組、中組、西組の代表者三名と王ノ浜地区の大西組の代表者一名の四名が毎年三重県の伊勢神宮に代参してお札を白王町の産土神である若宮神社に収める。津島講は、順番で決まっている二名の代表者が愛知県津島市の津島神社に代参でお参りに行き、牛頭天王の疫病退散、厄除けのお札を持ち



写真6 「日待講」「神明講」の掛け軸を入れる箱と講の帳簿
2025年1月筆者撮影



写真8 若宮神社の鳥居前にある牛頭天王祇園社
ここに津島講のお札が入っている
2025年1月筆者撮影



写真7 若宮神社の鳥居前に
ある愛宕講のお札が入る石塔
2025年1月筆者撮影

帰り、若宮神社の鳥居の横にある牛頭天王祇園社と呼ばれる祠に収める。愛宕講は、京都市右京区の愛宕山の火伏の神にお参りをする代参の講であるが、平成二十八年（二〇一六）を境に、代参は中止で、お札を郵送で送ってもらっている。

日待講と神明講は、少なくとも講員の集まりが保たれているが、代参を目的にする講は、かつては集まりがあつたそうであるが、現在は代参のみとなつて

いる、または代参も行っていないという現状がある。なぜこのようになってきたのかということについては次項で述べたい。

（二）講が続いて行かない理由

なぜ、講が今までのように盛んに行われなかつたという理由について、大西氏に尋ねてみた。大西氏は現在六十九歳。今から五十年前は、白王町での講はいずれの講も賑やかに行われていたという。とりあえず、みんなが集まって一杯飲んで、日頃のたわいもない話から心配事などさまざまな話題でいっぱいだった。地域のいろんな情報が飛び交い、入ってくる絶好の機会であつた。そこで振る舞われるものは、かしわのじゅんじゅん^{【註6】}や、ちよつとした幕の内弁当のようなものだったが、それを食べる楽しみがあつた。

しかし、今、講の運営を担っていかうとする人たちは、大西氏の一世代後（三十代から四十代）になり、社会の風習も変化し、価値観も含め大きく変わってきている。具体的に例を挙げると、まず、お酒（特に日本酒）を飲む若者が減ってきていることや、加えて、大勢で集まって飲食することがなくなってきたこと（二〇二〇年のコロナ禍以降は特に）、また、かしわのじゅんじゅんや幕の内弁当などに魅力を感じないなどが挙げられる。

集落の伝統的な慣習や信仰、地域コミュニティなどについては、心のどこかに大切であるという意識はあるものの、合理的にできないかということ为先

に考える風潮がある。

現代社会には、自分が暮らす地域以外に、楽しいものがたくさんあり、食べるものにも溢れている。かつてハレの日といえ、祭りの日であり、非日常的な食べ物や催事があつて、みんなが笑顔になる楽しみがたくさんあつた。現代に至っては、日常がハレの日であり、いつでも、どこでも、お金さえあれば、楽しみを享受できる。人のつながりも、わざわざ地域の人々とながらなくても、自分を中心に職場のコミュニティや趣味でつながる楽しいコミュニティがある。

また、大西氏は、「日待講」と「神明講」の講員に現状の聞き取りをしてくださつた。

①「日待講」と「神明講」の直会^{【注6】}（懇親会）が無くなつた理由

- ・ 家の者（家族・主に戸主の妻）に家周り（順番に）で組員を呼び食事の世話をするこの理解が得られない。（若い戸主の意見）
- ・ 男性中心社会の名残で、女性は出られない、裏方のみ
- ・ 酒の好きな人の寄り合い（飲めない人は苦痛）
- ・ 宿が世話することの苦労が大変（今の世代、酒を飲まない）
- ・ 昔は年に一度の楽しみ（その翌日に獅子舞が来るのも楽しみであつた）
- ・ 今の時代にそぐわない、楽しみでない
- ・ 日待講は、ハレの日を待つ一大イベントであつた

たが：

・「そんなに宴会したかったら他に何行って（宴席のある店）したらいい」とある若い者が発言したら、少し年長の者が、「講の目的が違うやろ、そんな考えやったらわし講をやめるわ」となり、一騒動発生した。

②講の目的・主旨が正しく伝えられているかどうか。

・ただお宿の家に正装して扇子を持って定刻に行けばいい。伝わっている世代が交代するときも、日待講ってなんや？神明講って何？が正しく家長から伝わっていないのと、また、伝えても、その重要さがほぼ理解できない世代になってきている。

・幕の内を食べるだけなんや：：くらいの意識しかない（ご馳走でないが）

・大人にも責任がある。正しく伝授していないこと

・お宿さん（当番の方）への連絡、講の全般的な責任者である組長が、講をお荷物的感覚で意識している。（うっさいな、なんでこんなのやらんならんの感がある）

・若い組長やからではなく、社会全体の変化が大きく影響する

・家は家族のもの、プライベートの詰まった聖地、そこを皆さん来て頂いて懇親会をすることが、全く理解できないし、相入れない。講をする不自然さへと否定的意見が固まりつつある。

講員に以上のような意識がある中で、講を大切に続けてきた世代の人々は、次の世代に引き継いでもらいたいと熱望しつつ、無理やりに伝統的な風習を続けてほしいと強要できない。自分たちの気持ちを伝える努力はするが、無理やり引き継いでくれたとしても、いずれはなくなってしまうと思う。これは仕方ないと大西氏はおっしゃった。

（二）講に変わるもの

白王町の現在の取り組みの中で、地域の人々が世代を超えて交流する取り組みとして、講に代るようなものがあるという。それは、白王町集落営農組合の活動である。

白王町は、西の湖という琵琶湖の内湖に面しているが、その西の湖に浮かぶ権座ごんざという鳥状の農地がある。平成十八年（二〇〇六）に、この権座も含めて周辺地域が、「近江八幡の水郷」として国の重要な文化的景観第一号に選定された。このことが大きな機運となって、平成二十年（二〇〇八）に、白王町

集落営農組合の有志が「権座・水郷を守り育てる会」を発足させ、権座での酒米づくりや収穫祭、コンサートなどを実施して地域づくりが積極的に行われた。

すると、そこに人が集まり、一旦故郷を離れた十名以上の若者世代がUターンして故郷に帰ってきたという。そして、その流れから、現在、三十代から四十代半なかばの若者が積極的に営農組合の農作業等に関わってくれている。彼らは別に仕事を携えているが、農繁期には、休みの日を利用して農作業を手伝って

くれる。もちろん時給で、賃金を払っていることもあるが、草刈りなど厳しい農作業にもしつかり取り組んでくれる。農作業で体を使って、みんなと交流し、少しだが収入にもなる。営農組合のみんなと作業する姿が何よりも楽しそうであるという。

白王町集落営農組合は、白王町の住民のほとんどが出資してできた農業組合で、離農者が増えたためできた多くの休耕田を耕し、先祖が残してくれた大切な農地を守っていくことが目的である。そこに地元ちよんの若者の力が加わったことは、大変嬉しいことだと大西氏は語っておられた。

まちづくりや、伝統を受け継ぐことも、実際に担っている人たちが楽しくなくては持続しない。伝統的な「講」には、信仰の大切さや、地域文化という貴重なものを含んでいるが、それを実行する際の楽しみたのしみのあり方が、時代に合っていないというのが現状であろうか。それを克服することができなければ、講の継続は難しいのかもしれない。

第四章 「行者講」の水行の行方

（一）水行への思い

最後に、大西實氏に「行者講」のこれからについて伺ってみた。

「行者講」をこれからの世代にバトンを渡していく中で、時代が今までと変わっているからと言っても、時代を超えた大切なものが伝統的

な講の中には受け継がれていると伝えていきたくいと思っている。同じ白王町に住んでいて、年に一度も会うことがないというのは寂しい限りである。

近江八幡で今もなお受け継がれる「松明祭り」は「松明結」と呼んで、設計図も何もない中、共同で作業して大きな松明を完成させる。そこにかけてえのないコミュニケーションが生まれ、さまざまな情報交換がなされ、世代の中で大切なものが次の世代に受け継がれるという機能を持っている。

一方で、古い慣習には息苦しさもある。白王町を守ってくれる鎮守の神様である若宮神社には、かつて、社守という制度があり、厄年に近い四十二歳前後の男性が、社守という役を二年半務めることになっていた。その二年半にはさまざまな禁忌があり、肉類や卵、牛乳など食べずにはいけない。食べられるのは魚だけ。そして年間二〇〇日、神社に出仕しなければならぬなどのしきたりがあった。しかしこれは、その当時（私が四十代の頃）の時代に合っていないということ、三年ほど長老格の人たちと話を続け、ようやく今の時代にあった制度に変えたという例がある。

「行者講」の水行は、唯一この白王町にしか存在しない貴重な地域文化である。今残っている行事は、先人がこの地でつないできたもので、我々が暮らすこの地の大切な記憶である。なか

なかうまく言葉にはできないが、次世代の人たちにこの大切さを理解してほしいというのが本心であり、「講」という行事は決して無くしてはいけないと思う。

行者講の水行については、来年は、少し早い目から講員の人たちと相談を始めようと考えている。誰か水をかぶる行者に立候補してくれるか。なければ、再来年でも。毎年水行をしなくても、何年かに一度でもできるような制度にしても良いのではと思っている。



写真9 若宮神社の本殿
2025年1月筆者撮影



写真11 白王町の産土神である若宮神社の参道
2025年1月筆者撮影



写真10 白王町のメインストリート
この東西の道を東から西へと行者は清めの水を被りながら歩く
2025年1月筆者撮影

(一) まとめ

近江学研究所では二〇二五年度に「講」をテーマにコミュニティについて研究を深めていこうとしている。今回の論考はその序章と考えたい。近江には多くの「講」と呼ばれる地域のコミュニティが今もなお、残っている。筆者は、これまでにさまざまな「講」を取材してきた。その中で感じたことは、あたり前のことかもしれないが、今回の近江八幡市白王町の事例も、他の事例も、「講」は、信仰として、地域文化として大切だが、これを受け継ぐ次世代の理解が無く、おそらくあと数年で終わらなくてはならなくなりそうという状況が共通していた。

どこまで、時代に合わせて形を変えることができるか。それが「講」存続の要であるのかもしれない。水行の復活に際して、大西氏の毎年でなくてもいいじゃないかというような、寛容な態度で講員に少しずつ投げかけていくことも大事なことで今回の取材で感じた。「講」の継続に対しては、決して明快な答えがあるわけではないが、そこには、先人の知恵であったり、自分が暮らす土地の積み重なってきた歴史を感じることができると大切な行事であることには違いない。

最後になりましたが、長時間の取材にお付き合いいただき、また貴重な写真や関連資料をご提供くださった大西實さんにこの紙面を使い感謝申し上げます。

注釈

二年

1. 「真野北村の「庚申講」——三〇〇年繋がってきた小さなひとつのコミュニティ」加藤賢治『成安造形大学附属近江学研究所紀要』第十号 二〇二一年発行に詳しく紹介している。
2. 「真野法界寺の六斎念仏」大津市真野中村の念仏講が繋ぐコミュニティの現状と課題」加藤賢治『成安造形大学附属近江学研究所紀要』第五号 二〇一六年発行に詳しく紹介している。
3. 近江学研究所発刊文化誌『近江学』第十号「湖と生きる」「湖辺の暮らし—伊庭集落—」という論考で「同年という組織」という見出しで取り上げている。
4. 旧暦の三十日をそれぞれ仏様の縁日とした「三十日秘仏」という信仰では、不動明王の命日は二十八日であるとされ、不動明王の縁日は一般的には二十八日となっている。
5. 水垢離とは、神聖な水で心身の垢（あか）を落として、身を清める行事のことをいう。
6. かしわのじゅんじゅんとは、滋賀県では、鶏のすき焼きのことを指すが、祭礼の直会（ナオライ）や、講などでのお会食で振る舞われる時は、家で採卵用に飼育していた鶏の中で、その役目を終えた鶏（おやどり・ひねどりという）をさばいて、感謝を込めていただくという。近江八幡市白王町でもその風習がある。

参考文献・資料

- ・近江八幡市史編纂委員会編『近江八幡の歴史 第三巻 祈りと祭り』二〇〇七年
- ・「ふるさと鳥」編集委員会編『鳥学区五十周年誌 ふるさと鳥』二〇一四年
- ・櫻井徳太郎著『講集団成立過程の研究』吉川弘文館 一九六

「真野法界寺の六斎念仏」大津市真野中村の念仏講が繋ぐコミュニティの現状と課題」加藤賢治『成安造形大学附属近江学研究所紀要』第五号 二〇一六年

「真野北村の「庚申講」——三〇〇年繋がってきた小さなひとつのコミュニティ」加藤賢治『成安造形大学附属近江学研究所紀要』第十号 二〇二二年

